

○令和3年度教育事業 「サバイバルキャンプ～水と共に生きる～」

【R3.8.2（月）～3（火）】

環境×防災

環境と災害の関係を考える2日間

サバイバルキャンプ
～水と共に生きる～

期日：8月2日(月)～3日(火)
対象：小学5年生～中学3年生
定員：20名(先着順)
費用：裏面参照

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大雪青少年交流の家
National Taisetsu Youth Friendship Center

国立大雪青少年交流の家は、環境ESD活動推進拠点に登録しています。

◆目的

ESDの基本的な考え方を取り入れ、フィールドワークを通して自然と災害の繋がりについて理解を深めるとともに、「水」をテーマとして災害時に求められる考え方や行動を考える機会とします。

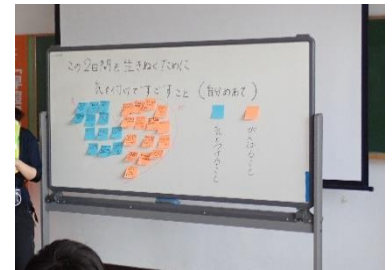
◆参加実績（定員20名）

- 参加者 18名
 - ・小学生 17名
 - ・中学生 1名

◆プログラム

① アイスブレイク・事業オリエンテーション・・・(90分)

災害が起こった時を想定して2日間を過ごすという意識を共通認識としてもつとともに、2日間を共に過ごす仲間とのコミュニケーションをとり、仲間意識を形成した。



② フィールドワーク・・・(240分)

災害時に一番必要なものは「水」という意見から、近くの川に行き、安全な水かどうかを確かめる実験（phや生き物がいるかの調査）を行いながら、協力して水の確保を行った。



③ 災害食体験（夕食・朝食）

お湯がない時の食事や、最小限のお湯を使っでの調理を体験し、実際の災害時の食事はどのようなものかの理解を深めた。



④ 災害時調理

耐熱性のあるポリ袋を使って、極力水を無駄にしない方法を考えながら調理活動を行った。それに加え、食材を無駄にしないこと、極力ごみを少なくすること、限りあるエネルギーを少なくすることなどのアイデアを出し合いながら、班ごとに工夫して調理を行った。



⑤ ふりかえり

2日間の生活で感じたことや、家に帰ってからできる自分の行動について共有し、今後の生活についての目標を考えた。



◆事業運営・企画のポイント

- 誰にでも共通して起こりうる「水」が不足した場合を想定したことで、参加者がテーマを絞り、生き延びるために何をしたらいいのかを考えやすい環境を作ることができた。
- ある程度、企画者として決められたプログラムをもちながらも、参加者の自主的・自発的な行動が活かされるような時間設定を行ったことで、子供達のアイデアが活かされる場面を作ることができた。

◆参加者の声

- 災害時にできることが増えたと思う。普段から、さらに気を付けて生活しようと思った。
- みんなと協力しながら過ごすことができた。
- 水、食料、電気、物の大切さを知れた。
- 普通のことを当たり前と思って生活していたことに気付いた。

◆事業の成果と課題

- ① 自分たちで考えて生活する、しおりのない事業としたが、そういった時ほど子どもたちが生き生きしているのを感じた。事業のねらいにもよるが、決められたプログラムに縛られない事業をしていくことも、子どもたちの自主的な活動を引き出す大事な視点と考える。
- ② ①に記述のように、自由度が高く、子供の自主性に任せた事業では、関わるスタッフやボランティアなどの意識を統一して関わるようにすることが大切。そのため、事前研修や、ボランティアの参加の呼びかけ時などにも工夫が必要であった。

